

性別に関する「無意識の思い込みエピソード」各賞及び入賞作品一覧（賞別）

表彰名	タイトル	エピソード	氏名等
グランプリ	素敵な本を書ける力	私は読書が好きです。特に、描写が繊細であったり、人の気持ちが多く書かれている本を凄いと感じます。素晴らしい作品は評価されていくものですが、少し前にとある感想サイトで「女性らしい繊細な感性だからこそ書ける話だった」という言葉を見たことがあり、それに違和感を覚えました。 繊細な描写を書ける感性と実力は、女性であるがゆえに身についたものではないんじゃないか。本当に評価されるべきなのは、女性という性別に属しているその人ではなく、素敵な感性と実力を持っているその人なのです。これは女性だけでなく、男性にも同じことが言えます。きっと似たようなことで、男性だから出来たことだね、と実力でなく性別について褒められてしまった人がいると思います。私達人間は性別以前に、それぞれの頭や心を持っています。枠組みに閉じ込められず、素敵な人が十分評価されていく世界になったら嬉しいな、と私は感じています。	中学生の部 U.Kさん
最優秀賞	『偉いね』に感じた違和感	子どもを保育園に迎えに行った時、保育士さんや他の保護者から「お父さんがお迎えなんて偉いね」「家庭的なお父さんって素敵だね」などと声をかけられることがありました。最初は褒められて嬉しい気持ちもありましたが、同時にどこか心に引っかかるような違和感も覚えるようになりました。その違和感の正体は、「無意識の思い込み」なのだと気付きました。 共働き家庭も増えている今、父親が迎えに行くことは特別なことではなく、家庭の役割分担の一つだと思います。逆に、毎日お迎えや家事をしている母親に対して、「偉いね」と改めて言う場面はあまり見かけません。その違いに、「子育ては母親が中心」という無意識の思い込みが、まだ社会の中に残っているのかもしれないと感じました。父親も母親も、それぞれが自然に子育てへ関われる社会になってほしいと思います。	一般の部 T.Yさん
最優秀賞	制服の自由と自分の意識	北谷中学校の制服はセーラー服や学ランからブレザーに変わり、制服の下もスカートかズボンかを選ぶようになった。私が入学するとき、私は迷わずスカートを選んだ。「女子だからスカート。」そう考えるのが当たり前だと思っていたからだ。しかし、入学してみるとズボンを履いている女子生徒がいた。その姿を見たとき、私は自分の無意識な思い込みに気がついた。制服は自由に選べるのに、私は女子だから、男子だからという考えにとらわれていたのだ。本来、自分の着たい制服を選ぶことは特別なことではない。この経験から社会の仕組みを変えるだけでは十分でないと感じた。大切なのは、私達一人一人が無意識の思い込みを見直し、相手の選択を尊重するということなのだと思う。そして、まずは私自身が意識を変えていきたい。性別を理由に悲しむ人が減るように。	中学生の部 N.Wさん

表彰名	タイトル	エピソード	氏名等
最優秀賞	みずいろのランドセル	ぼくがえらんだみずいろのランドセル。とてもきにいていたんだけど、「みずいろはおんなのこのいろだ」っていわれた。かなしいきもちと、なんでみずいろがおんなのこ？というおもいをおかあさんにいったら、おかあさんは「みずいろはおとこのこでもきるし、おんなのこのいろなんてきまってないよ。」といって、せんせいにてがみをかいてくれた。 つぎのひ、せんせいがいろぬりをしているときに、「みずいろはおんなのこのいろだとおもう？」ってみんなにきいた。そしたら「おもわない。」「ぼくみずいろすき」って、だれもおんなのこのいろっていわなかった。 ちゃっとうれしかった。	小学生の部 E.Kさん
最優秀賞	男の子だから!の、おしつけ	男なんだから、こわがるなとか、男の子だから、もっとはやく走れーとか、男だからでも、なんでこんなことしなきゃいけないのか、みんなにおしつけられたこともあります。 たとえば、男の子だからはきはきしれーとか、男の子だから女より、はやくはしれーとか、いわれたときもあります。男の子だから、こんなことしなきゃいけないのかなーと、思うこともあります。 でも、男でも女でも自分のすきなようにすればいい、ということをおもいました。自分のじんせいを、自分どうりに生きていくことにし、はきはき歩けーや、女よりはやくはしれーなどはあまりいわれなくなりました。自分のじんせいは自分できめて、自分でいきしていけばいいんです。	小学生の部 S.Dさん
優秀賞	女の子だから	母と友人との何気ない会話。 友人 「息子と娘いたよね？」 娘の仕事は、介護って偉いね。女の子がいる所はいいね！」 母 「歳をとったら、いろいろやってくれるのは女の子だから。」 その女の子だからという言葉！よく耳にするとおもいます。 親の老後の援助は女性、男性、関係なく最終的には親に対する気持ちが行動になると思っています。 ほとんどの人の理想は、家族に看取られて最期を迎えること。娘、介護職である前に人間なので。現在、親の介護で日々忙しい方々、全部一人で背負わないでほしいです。市町村、専門職に相談すれば負担も減り解決に向かうはずです！一番に自分の心と体のバランスを保ってほしいです。	一般の部 I.Mさん
優秀賞	性別より、その人らしさ	保育園で働いていると、「男性だから力仕事助かるね」と自然に言われることがあります。もちろん重い物を運ぶこと自体は嫌ではありませんし、力いっぱい身体を使って遊ぶことは大好きです！ でも、子どもたちへの細かな気配りや泣いている子に寄り添う場面では「女性の先生のほうが向いている」と決めつけられる空気に『違和感』を覚えました。 実際には、優しく丁寧に関わる男性保育士もいますし、力仕事や大工仕事を率先して引き受ける女性保育士もいます。性別だけで役割を決めるのではなく、『その人自身』を見て、得意なことを活かせる、認め合える環境が大切だと感じています。	一般の部 T.Yさん

表彰名	タイトル	エピソード	氏名等
優秀賞	助手席の主	「仲良しのラガーマンが本土から観光にくると、オープンカーで県内を縦横無尽に走り回るの」こう知人に話すと、高確率で「その助手席、いいな!」と返って来る。だが、実態は完全に逆転していて、オープンカーの運転席でアクセルを踏み込み沖縄の日差しと風を助手席にご馳走しているのは、他ならぬ私（女性）だ。屈強なラガー（男性）は、助手席に収まり、戦術を練る日常から解放され、流れる景色を眺める。これが我々の、自分らしさに無理のないスタイルだ。 冒頭のドライブエピソードから、人の脳は自動的に「エスコートする側は男性、される側は女性」という役割を補完する。これが、私たちの無意識の底にあるジェンダー・バイアスの正体だ。だが実は、運転やもてなしに、性別という属性は無関係だ。性別による「らしさ」という窮屈な過去の衣装を脱ぎ捨てた先にこそ、自分のための最適なシート(居場所)を選択できる、本物の「らしさ」がその手に残る。	一般の部 M.Mさん
優秀賞	報われないパパ	子どもは3歳くらいまでは、パパがどんなに育児を頑張っても「ママがいい」と言う。これは思い込みですか?いいえ、本能です。 でも、共働きが当たり前のこの時代に、「ママがいいって言うているから、ママがやった方が効率的だ」と処理してしまうなら、それは思い込みです。 どんなに子に嫌がられても率先して育児を引き受ける。そうすることで、子が一番大好きな存在のママに余裕が生まれ、笑顔で子に接することができるようになるかもしれない。そして、たぶん、それが家族としての幸せなんだと思う。	一般の部 N.Mさん
優秀賞	ブルーの服が教えてくれたこと。	去年娘が生まれてから、娘に関することや身の回りのことはほとんど私が決めていました。 夫も育児には積極的に関わってくれていましたが、そうしたことを決めるのは私の役目だとどこかで思っていたのかもしれませんが。 この前、初めて夫に娘の服を選んでもらったところ、いつも私が選ぶピンクではなくブルーの服を選びました。正直驚きましたが、その服はとても娘に似合っていて夫も嬉しそうでした。 この出来事を通して、私は「女の子はピンク」という固定観念を持っていたことに気付きました。また、服選びに限らず、娘に関するさまざまなことを私が決めるのが当たり前になっていたことで、夫が父親として関わる楽しみや喜びの機会を減らしていたのかもしれないと感じました。 性別による役割分担を当たり前と思わず、自分の思い込みを見つめ直すことの大切さを学びました。	一般の部 K.Nさん
優秀賞	当たり前の父の姿	父が保育士だと話すと、「珍しいね」「優しそうなお父さんだね」と言われることがあります。もちろん褒め言葉なのだと思います。でも私は、小さい頃から父が保育士として働く姿を見てきたので、「男性だから珍しい」と言われることに少し違和感を覚えていました。父は子どもたちと全力で遊び、時には悩みながら一人ひとりに向き合っています。その姿は、私にとって特別ではなく“当たり前の父の姿”です。仕事や役割を性別でイメージするのではなく、その人自身の思いや得意なことを見ていける社会になってほしいと思いました。	高校生の部 T.Yさん

表彰名	タイトル	エピソード	氏名等
優秀賞	お姉ちゃんだって甘えたい	まだ幼稚園くらいの小さな子にスーパーで、「もうお姉ちゃんになるんだからしっかりして!」と、お腹の大きなママが怒りながら言って、女の子は沈黙していました。私は、もうすぐ赤ちゃんが産まれるんだなと思いました。 でも怒られてた子は、まだ5歳くらいで、たくさんママに甘えたいはずだし、ハグされたり泣いたりわがママを言ったりしたいはずです。嫉妬はもちろん大事ですが、こんな感じで、大人がイライラしてるのを、ぶつけている姿をよく見かけます。 私は一人っ子なので、それを言われた経験が無いけど、子供はみんなお姉ちゃんやお兄ちゃんになりたくなかった訳じゃないと、大人たちは、少しは、考えた方が良くはないかと思いました。私は上の子はしっかりしなきゃいけないという偏見は無くした方が良くないと思いました。沖縄は5人兄弟も普通で兄弟が多い県です。子供は年齢は関係なく平等に甘えさせてあげたり愛を注いで欲しいと思いました。	中学生の部 Y.Sさん
優秀賞		私は、男女の友情は成立するのが難しいが、成立できることもあると思う。このことについて考えたきっかけは、よく周りでも話題になるテーマなので、一度自分でも考えてみたいと思ったからだ。友情とは、対等な立場で尊重し合い、一緒にいて楽しいと思える関係である。どちらかが好意や下心があったりすると恋愛感情になり、友情は成立しないという意見もある。また、「相手に魅力を感じる」という場合についても考えてみた。魅力とは、人をひきつけたりする不思議な雰囲気があるということで、ユーモアや見た目、やさしさなども魅力の一部だと思う。 しかし、私は、その魅力は人の良さでもあり、同性の友達にも感じることもある。だから、魅力を感じるだけで男女の友情が成立しないということにはならず、その人の良さを見てはいけないことにはならないと思う。一方で、男女の友情を持ちながら、「特別扱い」や「もっと見てほしい」という愛の求めや身体的関係などの下心が芽生えてしまうと、それは恋愛感情に行き始めていることになり、友情ではなくなると思う。そのため、お互いが恋愛感情を持たず、尊重し合い、一緒にいて楽しいと思える関係であれば、男女の友情は成立すると私は思う。	中学生の部 H.Aさん
優秀賞	髪長い男の子	同じ学年の子で髪の毛が腰までの長さがあり、目は明るく茶色で女の子だと思っていました。 だけど、カッコいいデザインの洋服を着ていて、自分のことを「オレ」と言っていたことから、男の子なのか、女の子なのか、とても気になりました。そして私は勇気を振り絞り、本人に聞いてみました。「せいべつどっち?」「男だよ。」「あー、そうなんだ。」私は、最初から性別を決めて聞くのは、相手のことを考えると傷つけないようにしたいと思い、「せいべつ」という言葉を使って聞きましたが、相手が素直に答えてくれたことでスッキリしました。性別は見た目だけでは、分かりにくいこともあるのだなと思いました。	小学性の部 Y.Rさん

表彰名	タイトル	エピソード	氏名等
審査委員 特別賞		女性だから、子どもを産むのは当たり前。今これを読んでいる方も、そうお思いでしょう。 けれどよくよく考えてみてください。男性のタイミングに合わせないと、女性がいつも悪になることを。 10代での妊娠は悪いこと。結婚して子どもができないのも悪いこと。墮胎するのも悪いこと。 シングルマザーになるのも悪いこと。 無論、“自立した女性” が一生独身で “産まない選択” をするのも悪いこと。 悪とされることで、女性は謎の罪悪感を背負わされ、うしろめたささえ感じ始める。 「元始、女性は実に太陽であった。」 その言葉から、すでに115年。 無意識の思い込みを捨てるには、それなりの努力と時間が必要です。 One step forward, two steps back. まだまだかかりそうですが、 「明るい方へ 明るい方へ。」 女性も男性も、きっと一緒に変わっていけるはず。 少しずつでも、確実に。	一般の部 T.Hさん
審査委員 特別賞	「立ちたいなら掃除して」	いとこの新居への引越し祝いで、男性陣は事前に「トイレは座ってお願い」と頼まれていた。後日の飲み会で男性陣から「小便は立ってしたい」と不満が出た。私は「自分たちが思っているより飛び散って汚れるよ。掃除してくれるならいいけど」と言った。これは実家でも兄や甥に注意し、兄に逆ギレされてきたことだった。 お酒の席だから気が大きくなっていたかもだけど、返ってきたのは笑いながらの「掃除は女がやってよ〜」「女はそれくらい許す優しさがないと男は辛い〜」だった。 掃除は女がやる、女は許す優しさを持て——昔より男性も家事するようになったけど、トイレ掃除と「女の優しさ」への期待はまだ根強く残っているように感じた。	一般の部 U.Aさん